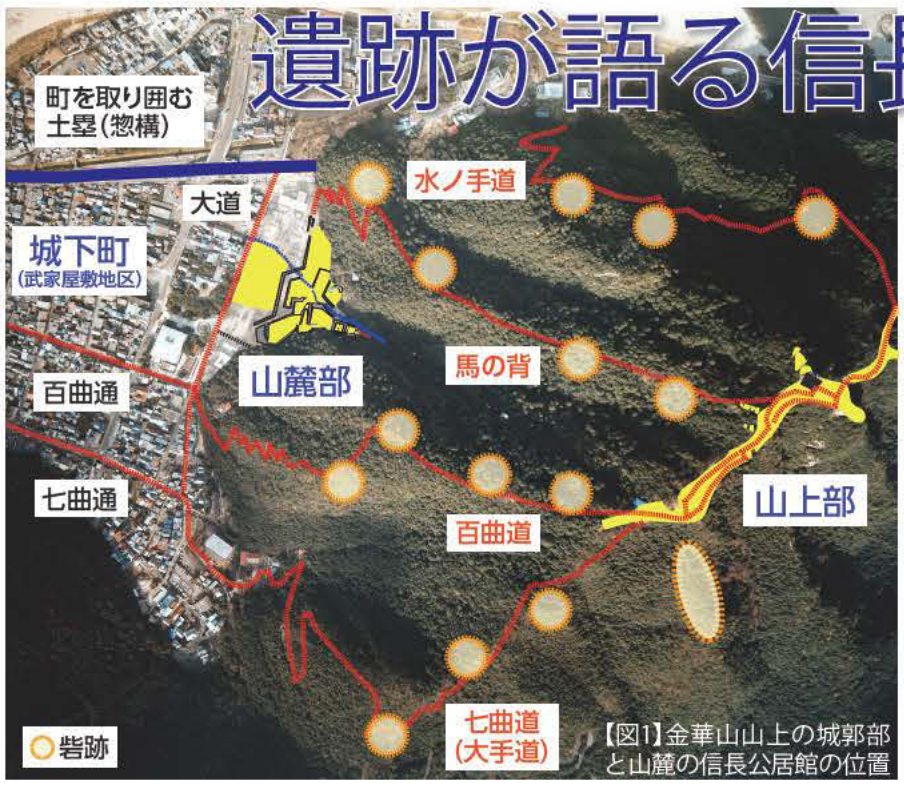
遺跡が語る信長公の「伝統」と「革新」

織田信長公居館跡発掘調査



【図1】金華山山上の城郭部と山麓の信長公居館の位置

戦国時代、斎藤道三公や織田信長公が居城した岐阜城は、稲葉山(金華山)山上の城郭部分と山麓の居館部分を中心とした山城(険しい山を利用して築かれた城)です【図1参照】。

永禄12年(1569)、ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、信長公に面会するため、この岐阜城を訪れました。彼が書き残した手紙や著書『日本史』には、山麓にあった4階建ての「宮殿」の記述が残されており、その豪華な建物の様子をうかがうことができます。

現在、金華山山麓で平成19年度から実施している「織田信長公居館跡発掘調査(第4次)」は、居館の全体像の解明を目的としています。これまで、フロイスの記述を彷彿(ほうふつ)とさせるような庭園跡をはじめ、建物跡や石垣が見つかるなどさまざまな発見が相次ぎ、山麓の居館跡全体が迎賓館のような役割を果たしていたと考えられるようになってきました。

こうした成果を受けて、平成23年2月7日には、山麓の居館跡を含め、天然の要害として機能した金華山一帯の約209ヘクタールが国史跡「岐阜城跡」として指定されています。

発掘された遺跡は、信長公が何を考え、どう生きていたのかを、時に文書よりも雄弁に物語ります。「伝統」と「革新」をキーワードに、今年度の新発見を中心に岐阜時代の信長公の姿を探ります。問 社会教育課(内線6354)

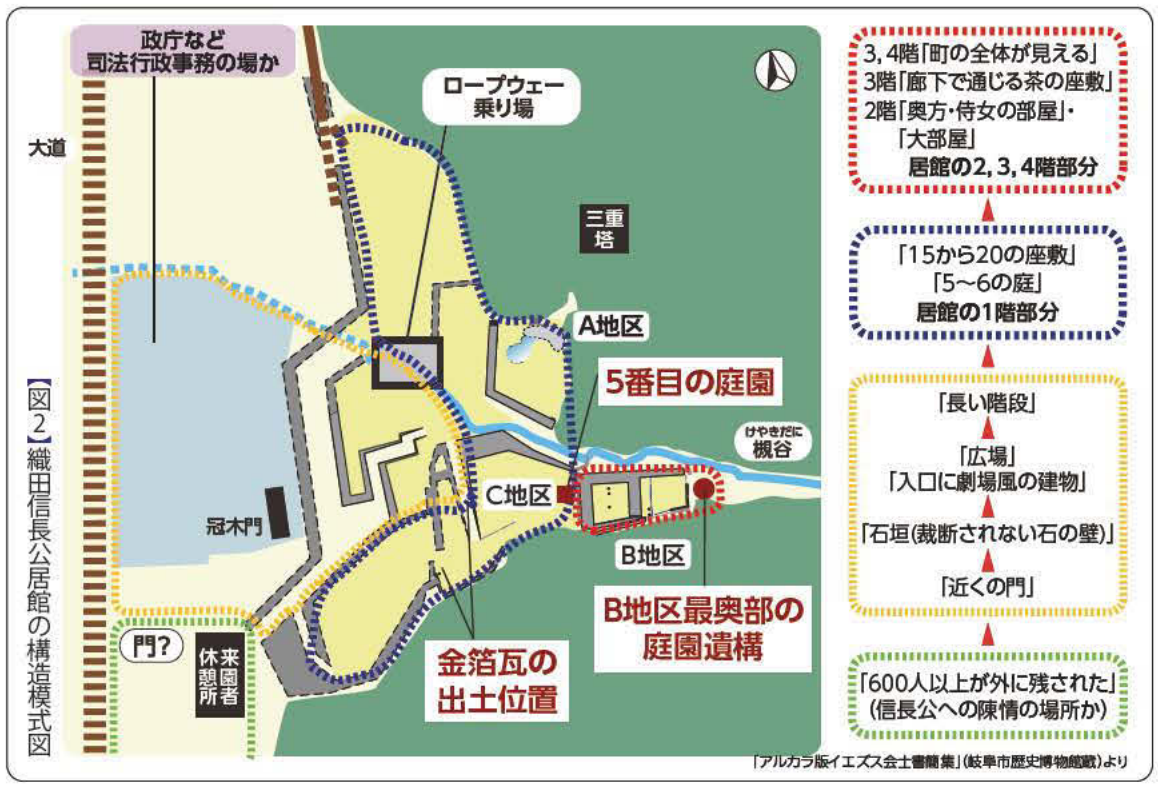
伝統

山麓の庭園遺構群 ―5番目の「庭園」を発見

フロイスは、居館の庭について次のような記述を残しています。

「庭と称するきわめて新鮮な四つ五つの庭園があり、その完全さは日本においてはなはだ稀有(けう)なものであります。それらの幾つかには、1パルモ(約20㎝)の深さの池があり、その底には入念に選ばれた鏡のように滑らかな小石や眼にも眩(まばゆ)い白砂があり、その中に泳いでいる各種の美しい魚が多数おりました。」(ルイス・フロイス著『日本史』松田毅一・川崎桃太訳)

この記述を裏付けるように、これまでの調査では、居館の平坦地ごとに池の存在が確認されています。しかもそれらは、周囲の山肌に見える天然の岩盤を背景に取り入れた、壮大な庭園となっているのが特徴です。B地区の最奥部【図2参照】では、円形状の石組みと池が一体となった庭園遺構が見つかりました。その構造や立地は、室町幕府第八代将軍・足利義政の別荘「東山殿(ひがしやまどの)」(現在の銀閣寺)や、将軍家とゆかりの深い「西芳寺(さいほうじ)」と類似していることから、室町将軍邸の庭の系譜に連なる可能性が指摘されています。これは信長公が、室町将軍家の「伝統」や「権威」を継承しようとした一面があったことを物語っているようです。



【図2】織田信長公居館の構造模式図
「アルカラ版イエズス会士書簡集」(岐阜市歴史博物館蔵)より

● 5番目の「庭園」を発見!

今年度は、金華山ロープウェーのりば南東側の、居館の中心建物が存在したと考えられる平坦地(C地区)で発掘調査を実施しています。この平坦地の東端(以前「明治大帝像」があった場所)で、新たな庭園が見つかりました【写真1】。

南北7.5m以上、東西6.1m以上の南北に長い楕円形をした「池の跡」です。池の深さは約35㎝、池の底には小円礫(えんれき/丸い川原石)が敷き詰められていました【写真2】。フロイスの記述にある「入念に選ばれた鏡のように滑らかな小石…」を彷彿とさせます。また、池の手前では、建物の柱を立てた礎石が2つ見つかりました。庭園に隣接した建物から庭園を鑑賞していたことが考えられます。

庭石を抜き取った跡からは「緑色片岩(りょくしょくへんがん)」と呼ばれる石材が確認されました【写真2】。これは「青石(あおいし)」とも呼ばれ、室町時代以降、京都の庭園の庭石として珍重されている石材です。美濃では産出されない石材であり、わざわざ庭に据えるために運ばせてきたのでしょう。

こうした庭の特徴も、室町時代の流れをくむもの。信長公の「伝統」を重んじる側面が、この5番目の「庭園」にも表れています。

【写真2】池の底に敷かれた小円礫。写真左下には庭石を抜き取った跡があり、緑色片岩が見える。

【写真1】新たに見つかった「池の跡」(西から撮影)

史跡岐阜城跡の保護・活用の取り組みを進めています

市は、上記のような金華山の歴史的変遷と価値の重層性を踏まえた上で、将来にわたり守り伝えていくための「史跡岐阜城跡保存管理計画書」を昨年3月に策定しました。図書館や市ホームページなどでご覧いただけます。

また、この計画を受けて、今年度は史跡の整備活用に向けた「史跡岐阜城跡整備基本構想」を策定しています。

● 金華山を大切に。マナーを守って楽しみましょう!

史跡の大半は国有林であり風致地区や保安林、鳥獣保護区などの法規制によっても保護されています。また、平成23年9月1日から、登山道が路上喫煙禁止区域に指定されています。さらに、登山道については、岐阜森林管理署やボランティア団体の皆さんとともに維持管理やパトロールを実施する【左の写真】など、さまざまな保護の取り組みが行われています。

史跡岐阜城跡＝金華山を後世に継承していくためにも、山火事の元となる火の使用はもちろん、決められた登山道を歩く、ごみは必ず持ち帰る、自然を大切にするなど、マナーを守って楽しみましょう。

革新「見せる」城作り
―「金箔瓦（きんぱく）」を発見

一方、信長公の「革新性」を象徴するものとして、巨石を立て並べた石列【写真3】と金箔瓦があります。巨石列は、ほかの城郭ではほとんど見られないもので、岐阜城では石垣と併用されているのが大きな特徴です。居館の入口部分をはじめ、山上部も含めて要所と見られる場所に存在しています。

巨石列は、見る者を威圧し権力を誇示する「装置」としての役割を果たしていたと考えられますが、周囲の岩盤も巨石のように加工されている箇所があります。フロイスの記述には「驚くべき大きさの截断（さいだん）されない石の壁」が城を取り囲んでいたとありますが、それは巨石と岩盤の双方を指しているのかもしれません。

●「金箔瓦」を発見！

これまでの調査で出土した物を整理する中で、平成20年・22年に出土した瓦が「金箔瓦」であることが判明しました。28㎝四方、厚さ3㎝の「飾り瓦」です。瓦片を組み合わせると、約60枚の花びらで「牡丹（ぼたん）」を表現したとみられる瓦と、約20枚の花びらで「菊」を表現した瓦の2種類が復元できました。飾り瓦は慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの前哨戦で火を受けたとみられ、変色しています。この瓦を科学分析した結果、漆を接着剤にして金箔を貼った痕跡が確認できました。

立体的な牡丹文様の瓦が見つかったのは、日本初です。やや時代が下りますが、スペイン人の貿易商人アビラ・ヒロンの著書『日本王国記』（1615年）に記されている、「薔薇（ばら）の花模様」の瓦を想起させます。

「城を覆っている屋根瓦は、ぎっちりとふいて凹面で覆い、外側にはあるいは金色、あるいは緑、青、紅、その他見る目も鮮やかな色どりの薔薇の花模様が現れるように形作られていた。」

「洛中洛外図屏風」【写真4】や、豊臣秀吉の邸宅を描いた「聚楽第（じゅらくだい）図屏風」などには、将軍や秀吉など特別な人に関わる重要な建物の棟（むね）を金箔の瓦で飾る描写がみられます。見つかった瓦も、信長公居館の中心建物の棟を飾る目的で用いられたのでしょう。

城郭に金箔瓦を用いたのは、天正4年（1576）に建築が始まった安土城（滋賀県近江八幡市）が最初とされていましたが、今回の結果から、永禄10年（1567）に岐阜城に入城した信長公が、安土城に先駆けて、岐阜で金箔瓦を使用した可能性が高くなりました。おそらく城郭に金箔瓦を用いる日本で最初の事例になると思われます。

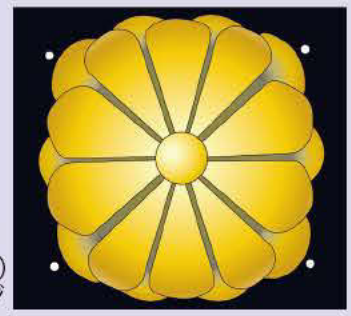
小和田哲男さん（静岡大学名誉教授）は、「御殿風の建物を飾った瓦であると考えられる。菊は特に、牡丹も権力を象徴する花であり、その二つを意匠として取り入れていることは、そのころの信長の「天下」への夢を物語っている」と述べています。

▶金箔が付着した飾り瓦（菊花文）の一部

飾り瓦（菊花文）

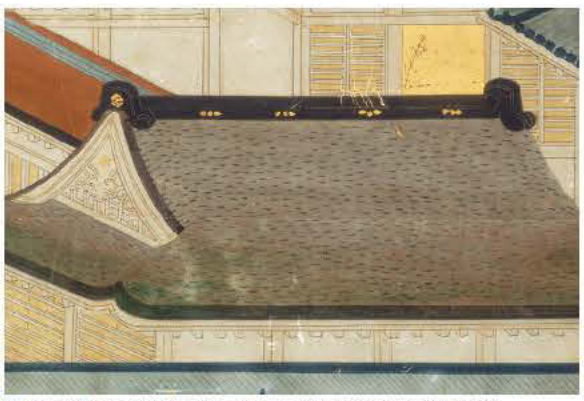
飾り瓦（牡丹文？）

◀飾り瓦（牡丹文？）の復元イメージ



▶飾り瓦（菊花文）の復元イメージ

【写真3】岐阜公園最大の巨石列



【写真4】洛中洛外図屏風（二条城御殿部分）〈江戸時代／岐阜市歴史博物館蔵〉　京都の様子を描いた「洛中洛外図」には多くの建物が描かれているが、棟を瓦で覆い、金で飾っている表現がされている建物は二条城御殿のみである。

【写真5】飾り瓦使用の推定模型　瓦の使用は棟など限られた箇所であり、屋根部分は檜皮葺（ひわだぶき）もしくは板葺きであったと考えられる。

1月31日㈭まで、歴史博物館総合展示室で金箔瓦の速報展示をしています。ぜひご覧ください！